

第10回 生涯学習フェスティバル



かりゆし太鼓



子ども三線ひやみかち



ティナーレー



西原町太極拳同好会



歌謡舞踊和の会



キッズ英語



連玉吟友会



日舞喜の会



フラサークルパニアナ



レイピカケ



手話サークル月桃



西原レファフラサークル



コントラクトブリッジ同好会



社交ダンスサークル



手話サークル四季



西原ハイソフラスサークル



プナヘレ



オカリナサークルジャスミン・カトレア



歌謡同好会



歌声ベルカント西原



指笛王国おきなわ



コールにしはら



大正琴サークルたんぽぽ



大正琴 さわぶじ・さくら



遊び書き結書



生け花サークル桔梗



サークル紹介①



サークル紹介②



一心書道会



水彩画



老人クラブ連合会①



老人クラブ連合会②

西原町のサークルが一堂に会し、日ごろの活動の成果を披露する第10回生涯学習フェスティバルが2月1日にさわぶじ未来ホールで開催されました。今年は老人クラブ連合会の展示も新たに加わり、46団体の多種多様なサークルがダンスや歌、舞踊、演奏、絵画、生け花展示などの活動の成果を発表しました。

会場にはスマホ、パソコン教室、カードゲームの体験ブースもあり、訪れた幅広い年代の方が楽しんでいました。

お問い合わせ：中央公民館 TEL：098-945-3657

～ 戦後80年 記憶の継承 ～ No.6

沖縄戦の終戦から80年を迎えた今日、戦争体験者の減少、戦後世代の増加と相まって、戦争の歴史的教訓が年々風化し、その悲惨さが忘れ去られようとしています。

西原町は、戦争体験者の方々からの貴重な体験談を紹介し、次世代へ継承していきます。

青春は戦火の中で (西原町史 第三巻 資料編二 西原の戦時記録より)

たまなほ
玉那覇ソル(当時23歳) 主婦

10・10空襲を見学

私は6人の親です。今まで心の中に焼きついた戦争の恐ろしさ、苦しさを戦争を知らない若者のために、書き残したいと思います。昭和19年10月10日、沖縄に初めて大空襲があった。その時那覇市は火の海となり、焼野原に変わり果てた。翌20年3月23日、米軍は沖縄を包囲し、その後、北谷の浜から上陸した。目の前の久高島の爆撃の時は大田良森に上って見たが、見事なものでした。初めて見るので恐ろしくはありませんでした。みるみる内に製糖工場も爆撃を受け、我謝の部落も爆弾が投下されたので、あわてて防空壕にとびこんだものです。その後、桃原の森の中の壕に移った。その壕の中から私たち若い者は連れ出され、友軍の炊事をさせられた。1週間後、石部隊は第一線に出陣すると同時に全滅だったそうです。また、球部隊にも参加したが、戦がはげしくなったので「南部に避難するように」との軍からの命令で友軍と別れて、家族をさがしに行く途中、頭に傷を負った。

忘れ得ぬ戦争の苦しみ

戦争は日々激しくなり、やっと家族をさがして南部へ避難したが、歩く途中足のにぶい母と弟と別れ別れになった。何万人という避難民の行列の中で、しかも夜、家族を捜すのは無理でした。1ヵ月後に知人の知らせで家族のところに飛んで行きました。母はけがしてやつれていました。

歩く事も無理な母をかかえながら、ようやく辿り着いた所が真壁部落でした。親戚の人達と一緒に防空壕を掘り、そこで避難した。空襲も止んだので炊事の用意をしようと、外へ出たとたん近くに爆弾が落ち、隣の家の避難民が全滅した。私たちの壕にも破片が飛んできて姉は足を取られ、母は即死し、私も小指をとられ、弟だけが無事でした。母がなくなっても涙も出ず、自分の苦痛しか考えられなかった。この真壁部落も激戦地となり、やがてアメリカ軍が侵入するとの情報があり、次の部落へ避難する事になった。歩ける者は去り、私たちだけ取り残された。出血して水を欲しがると姉に水を上げ、胸をさかれる思いで姉を残し、弟と一緒にその部落を去った。傷を負っている兵隊、老人や子供たち、家族に置き去りにされて苦しんでいる人たちの面影は、今でも頭の中に焼きついて忘れる事は出来ません。

戦禍を繰り返すな

飲まず食わず3日間、行先は果てしなく、どこを見ても死人の山、砲弾が落ちると死人の上にもふせたりしてようやくたどり着いた所が喜屋武村の近くの森の中のあばら屋だった。そこにはけがをして歩けない者ばかりがいた。もう砲弾の音も聞こえず安全な場所でした。夜が明けると、避難民が道いっぱい行列して歩いて行くのが見えた。戻って来る者は1人もいません。私たちも行きましょうと、さそい合って少し歩いて行くと、アメリカ兵が「カマン、カマン」としゃべりながら近づいて来ました。恐る恐る手を上げて捕虜になった。その翌日が、沖縄の慰霊の日当たる6月23日でした。捕虜にされて落ち着いた所が佐敷村でしたが、そこからまた、山原へ移動させられた。着いた所が久志村の開墾地でした。そこでも戦は絶えません。避難民はマラリアのために、いためつけられ、毎日死者は絶えません。私もマラリアに苦しめられ、生きて故郷へ帰れるとは思っていませんでした。あんな激戦の中をよくも生きぬいたものだと、自分でも不思議なくらいです。私たちの青春は戦争のために奪われましたが、自分の子や孫たちには二度とこんな思いを味わわせたくありません。また、二度とこんな恐ろしい戦争が起こらないように祈らずにはいられません。

【西原町史】は西原町立図書館でご覧いただけます。